

国立国語研究所学術情報リポジトリ

明治初期以降の哲学と論理学の新出語

著者	朱 京偉
雑誌名	日本語科学
巻	18
ページ	71-93
発行年	2005-10
URL	http://doi.org/10.15084/00002146

明治初期以降の哲学と論理学の新出語

朱 京偉

(北京外国語大学)

キーワード

語彙史, 専門語, 哲学用語, 論理学用語

要 旨

本稿は、本誌12号に掲載した筆者の論考（朱京偉 2002）の後を受け、明治初期以降、つまり、西周と『哲学字彙』初版以降の哲学用語と論理学用語の新出語を特定し検討することを目的とする。そのために、考察の範囲を明治期の哲学辞典類から哲学書と論理学書に拡大して、選定した31文献の範囲で用語調査を行い、個々の用語の初出文献をつきとめた。また、新出語の特定にあたり、抽出語を「哲学書と論理学書共通の用語」と「哲学書のみ用語」「論理学書のみ用語」に3分類した上、その下位分類として、さらに、「出典なし」「漢詞 未見」「出典あり」「新義・分立」の4タイプに振り分けた。それぞれの所属語の性質を検討した結果、明治初期以降の新造語として、191語をリストアップしておいた。

ただし、本稿で用いた方法は、哲学と論理学にしか使われない専門性の強い用語については、その初出例を求めるのに有効であるが、一方、哲学と論理学以外でも使われるような汎用性の高い用語については、哲学書と論理学書の範囲で初出例が明らかにされたとはいえ、他の分野でも使われている可能性があるため、今後は、その初出例の信憑性を検証しなければならない。

1. はじめに

筆者は、明治・大正期の哲学辞典類を対象に、近代哲学用語の成立に関する調査を行なったことがある。この調査によって、西周と『哲学字彙』（以下『字彙』と略称）初版の用語が哲学用語の中核をなしていること、明治20-30年代が哲学用語の大量創出期にあたること、また、哲学用語の中で、古い典拠をもつ在来語と明治以後の新造語は、おおよそ4対6の割合になっていることなどを明らかにすることができた¹。しかし、なおいくつかの課題が残されていた。たとえば、哲学辞典の資料的性格に制約されたため、西周と『字彙』初版の用語を特定できたものの、その他の新造語の初出時期や造り手については触れる余裕がなかった。また、論理学は、広義の哲学の一分野として哲学用語を用いる一方、独自の用語も持っている。論理学独自の用語についても、哲学用語の一環として調査する必要がある。

本稿では、哲学辞典に関する用語調査の結果を踏まえ、明治期の哲学書や論理学書に調査の範囲を拡大して、こういった課題の解明をめざしたい。

2. 調査対象の選定

哲学辞典類による用語調査は、哲学用語形成の流れを概観するのに能率的で便利である。しかし、一つの用語が現れてから、ある程度の一般化を経てはじめて辞典類に登録されるのが普通なので、辞典類の収録語は、初出の時期から多少遅れることが予想される。これに対して、哲学書と論理学書は、著者達の研究成果を代表するようなもので、それぞれの著書において新語が導入される可能性が十分考えられる。この意味で、個々の哲学用語の初出時期を探るにはより適切な資料群といえよう。ただし、大量にのぼる明治期の単行本資料の中から本稿の目的に適する調査対象を選定しなければならない。この点において、参考文献にあげた船山信一の論考をはじめ、諸先学の研究が大いに参考になった。朱京偉(2002)で、明治期の哲学辞典類と著書類の相互関係に触れてはいたが、今回の調査にあたり、さらに著書の種類を充実させ、表1の通り、哲学書13種と論理学書18種を研究の対象として選定した²。

表1 研究対象の選定と用語の抽出

	哲学書	抽出語	論理学書	抽出語
明 10 — 明 19	井上円了『哲学一夕話』(1886)	152	戸田欽堂訳『論事矩』(1879)	91
			鈴木唯一訳『思想之法』(1879)	131
			尾崎行雄『演繹推理学』(1882)	80
			菊池大麓『論理説略』(1882)	86
			添田寿一訳『論理新編』(1883)	162
			千頭徳馬『論理指鍼』(1885)	85
			平沼淑郎『論理学』(1886)	55
明 20 — 明 29	井上円了『哲学要領』(1887)	232	清野勉『帰納法論理学』(1889)	83
	清沢満之『純正哲学』(1888)	197		
	三宅雪嶺『哲学涓滴』(1889)	433		
	金子馬治『哲学綱要』(1895)	341	三宅雪嶺『論理学』(1889)	169
			三宅雪嶺『論理学』(1890)	138
			清野勉『帰納演繹論理学』(1892)	136
			大西祝『論理学』(1893)	71
			清野勉『普通論理学』(1894)	120
	清野勉『韓図純理批判解説』(1896)	184	高山樗牛『論理学』(1898)	107
明 30 — 明 40	松本文三郎『認識論提要』(1897)	147		
	中島力造『ラッド氏認識論』(1898)	310		
	松本文三郎『哲学概論』(1899)	291		
	桑木厳翼『哲学概論』(1900)	318		
	井上哲次郎『認識と实在…』(1901)	219		
	朝永三十郎『哲学綱要』(1902)	164		
	淀野耀淳『認識論』(1907)	254	中島力造『論理学講義』(1901)	99
			桑木厳翼『論理学綱要』(1902)	133
			大西祝『論理学』(1903)	111
			紀平正美『最新論理学綱要』(1907)	122

表1で見ると、明治10-19年(1877-86)の間、哲学書側がほぼ空白となっている。しかし、哲学関係の書物が皆無というわけではない。例えば、吉田五十穂訳『西哲小伝』(1880)、井上哲次郎著『西洋哲学講義』(1883)、和田滝次郎訳『哲学通鑑』(1884)、有賀長雄訳『近世哲学』(1884-85)、中江兆民訳『理学沿革史』(1885)などをあげられるが、これらは、みな哲学用語の少ない西洋哲学史関係の本なので、対象外としたのである。なお、中江兆民著『理学鉤玄』(1886)は、早期の哲学概論書として有名であるが、用語の面では、西周や『字彙』初版以来の主流に従わず、例えば、「哲学」「物理学」「化学」といった用語の存在を知っていながらも、わざわざ「理学」「物性学」「物化学」を使用するなど、自己流の用語を押し通そうとする姿勢が強かった。このような個性的なものも調査対象からはずした。

3. 抽出語の整理と分類

3.1. 3系統文献の用語の照合

表1の「抽出語」欄に示した数字は、調査対象の各文献から抽出した哲学・論理学用語の異なり語数である³。この語数の中には、哲学書どうしの間や論理学書どうしの間だけでなく、哲学書と論理学書という2系統の文献の間でも、まだ重複する用語が大量に含まれている。つまり、哲学書と論理学書の利用語を別々に検討するだけでは、同一の用語がどの文献で最初に使用されたかが把握しにくく、個々の用語の使用範囲と使用頻度も明確にとらえられない短所がある。また、哲学書・論理学書に出てくる用語と哲学辞典の収録語との関係についても考えるべきである。3系統文献の用語を互いに照合する必要があるため、次のような手順で、抽出語の整理と分類を行うことにした。

(1) まず、哲学書13文献の抽出語を対象に、個々の語の初出文献名と所在文献数がわかるように、延べ語から異なり語に整理する。例えば、「要素」という語は「三宅1889」「金子1895」「中島1898」「朝永1902」「淀野1907」の5種の文献に見られるので、出版時期の最も早い「三宅1889」を初出文献とし、所在文献数を「5種」と記しておくようにした⁴。これとともに、論理学書の18文献についても、哲学書の抽出語と同じ方法で異なり語に整理する。

(2) 明治初期以降の新出語を特定するために、哲学書と論理学書の抽出語を、筆者作成の西周用語リストと『哲学字彙訳語総索引』(飛田良文編 1979)を使って、「西周と『字彙』初版の用語」と「西周と『字彙』以外の用語」の二つの部類に振り分ける。なお、新出語の初出文献をつきとめる必要から、哲学書と論理学書のほかに、哲学辞典の収録語とも照合すべきなので、朱京偉(2002)で研究対象に選定した哲学辞典8種の抽出語(881語)を取り入れる。この段階で、3

表2 3系統文献の抽出語の異なり語数

	西周と初版の用語	それ以外の用語	異なり語合計
哲学書13種	468 (59.3)	321 (40.7)	789
論理学書18種	356 (55.6)	284 (44.4)	640
哲学辞典8種	503 (57.1)	378 (42.9)	881

()内は%

系統の文献の抽出語は、表2のようにになっている。

(3) 表2のように整理すると、哲学書・論理学書・哲学辞典の内部において、それぞれ異なり語になったものの、3系統の文献の間では、まだ複数の系統に跨って使用される用語が数多く含まれている状況である。そのため、3系統のすべての抽出語を合流させ、もう一度、手順(1)と類似する方法で、各用語の初出文献名と所在文献数がわかるように、延べ語から異なり語に整理していく。例えば、「因果律」という語は、哲学書「金子1895／4種」・論理学書「高山1898／3種」・哲学辞典の「徳谷1905／5種」のように、3系統の文献に共通に見られるが、出版の最も早い哲学書「金子1895」を初出文献とし、所在文献数を「12種」と合計しておく。このように、3系統の抽出語を合流させると、個々の用語は、実際の使われ方によって、次の7パターン中のどちらか一つに振り分けられることになる。所属語の数を示すと、表3の通りである。(表中の「哲・論・辞」は、それぞれ「哲学書・論理学書・哲学辞典」の略称にあたる。)

表3 3系統の抽出語の照合と整理

	用語のパターン	西周と初版の用語	それ以外の用語	異なり語合計
哲学と 論理学 共通の 用語	哲・論・辞共通	157 (80.1)	39 (19.9)	196
	哲・論共通	32 (54.2)	27 (45.8)	59
	哲・辞共通	126 (60.3)	83 (39.7)	209
	論・辞共通	52 (66.7)	26 (33.3)	78
1系統 のみの 用語	哲学書のみ	153 (47.4)	170 (52.6)	323
	論理学書のみ	115 (37.6)	191 (62.4)	306
	哲学辞典のみ	172 (41.2)	245 (58.8)	417
	類別合計	807 (50.8)	781 (49.2)	1588

()内は%

3.2. 研究対象の再整理

表3の段階になると、哲学書・論理学書・哲学辞典の系統別を問わず、重複語がすべて排除され、しかも、各用語の初出文献名と所在文献数が明らかになったとともに、哲学と論理学の両方に使われる用語なのか、あるいは、1系統しか使われない用語なのかといった性格もわかるようになった。

3系統の抽出語を「西周と初版の用語」と「それ以外の用語」の二つに振り分けてみると、両者は、それぞれ哲学用語の約半分を占めていることがよくわかる。このうち、「西周と初版の用語」は、とくに、「哲学と論理学共通の用語」の部類においてより高い比率を見せ、「哲・論・辞共通」のパターンでは、約8割に達している。これによって、西周と『字彙』初版の用語が近代哲学用語の中核をなしていることをあらためて確認することができた。ただし、哲学書と論理学書にある「西周と初版の用語」は、朱京偉(2002)でとりあげた哲学辞典にあるこの種の語とほぼ重なっていることが調査を通して明らかになったので、本稿では、西周と『字彙』初版以降の新出語を究明するために、「西周と初版以外の用語」だけを研究対象とすれば十分である。

表3では、また「哲学と論理学共通の用語」と「1系統のみの用語」のように二分している。この分類によって、哲学用語と論理学用語の重なり具合をとらえることができる。表中の「哲・論・辞共通」とは、哲学書・論理学書・哲学辞典の3系統で共通に見られる用語を意味し、「哲・論共通」とは、哲学書と論理学書の2系統で共通に見られる用語のことである。この2パターンの語は、哲学と論理学の共用語として位置付けられる。とくに「哲・論・辞共通」の語は、使用頻度が高く、哲学用語の中でも基本的な役割を果たしているといえよう。「哲・辞共通」の語は、哲学書と哲学辞典の両方に見られるもので、「論・辞共通」の語は、論理学書と哲学辞典の両方に見られるものである。2系統の文献に見られるので、「共通の用語」として数えたのだが、哲学辞典には、狭義の哲学用語と論理学用語の両方がともに収録されるのが普通であるため、論理学書に見られない「哲・辞共通」の語は哲学専門的な性格を持ち、反対に、哲学書に見られない「論・辞共通」の語は論理学専門的な性格を持っているとも考えられる。

表3によると、「1系統のみの用語」の語数は、「哲学と論理学共通の用語」に比べて、かなり多くなっている。それは、「命名」「摂取」「単独」「判別」「引用」のような、哲学用語の周辺に位置する一般語や、「反体」「設若体」「外衍」「局称」「汎意名辞」のような、著者の個人的用語にとどまって、現代語に受け継がれなかったものが数多く含まれているためである。このうち、「哲学辞典のみ」の語は、朱京偉(2002)ですでに検討済みなので、小論の研究対象からはずすことにした。

以上のように整理すると、小論の研究対象は、表3の網掛けの部分だけに絞られてくる。以下は、表3の枠組みに基づいて、各パターンの新出語を検討していきたい。

4. 哲学書と論理学書に共通に見られる新出語

本稿でいう新出語とは、換言すれば、哲学書と論理学書に見られる西周と『字彙』初版以外の用語のことである。ここでは、朱京偉(2002)で用意した下位分類（つまり「出典あり」「出典なし」「『漢詞』未見」「新義・分立」の4分類）と同様に、用語の振り分けを行なった⁵。この種の語の分布を所在文献数と関連付けて見ると、表4のようになる。

この表で言えるのは、調査対象となった31種の文献の中で、10種以上の文献に共通に見られる用語が非常に少ないのに対して、1種と2種の文献にしか見られない用語が比較的多く、全語数の57.2%を占めていることである。つまり、この種の用語は、西周と『字彙』初版の用語に比べて、使用頻度と定着度の面で、ともに低くなっている。また、この種の語のうち、明治以降の新造語に属する「出典なし」と「『漢詞』未見」の語が全語数の61.7%を占めていることも、この表によってわかる。以下は、表4で示した四つのタイプについて詳しく検討してみよう。

4.1. 「出典なし」タイプの語（60語）

このタイプの語については、古い漢籍に出典を持たない上、19世紀以降の在華宣教師の漢訳洋書と英華字典、それに、蘭学者の著訳書と英和辞典類において、その用例の有無を確認する必要もあるが、筆者の調査によると、事実上、そのほとんどは明治以降の新造語で占められている。

表4 哲学書と論理学書に共通に見られる新出語の分布

所在文献数	出典なし	『漢詞』未見	出典あり	新義・分立	所属語数
13種	1	0	0	0	1
11種	0	0	1	0	1
10種	0	0	1	0	1
9種	0	0	1	0	1
8種	2	0	1	0	3
7種	3	0	1	1	5
6種	5	4	3	0	12
5種	5	1	0	0	6
4種	4	4	4	1	13
3種	10	3	15	4	32
2種	12	17	19	5	53(30.3)
1種	18	19	8	2	47(26.9)
合計	60(34.3)	48(27.4)	54(30.9)	13(7.4)	175(100)

()内は%

しかし、「出典なし」であることが確認されたとはいえ、今回の調査範囲で得た初出文献の用例がすなわち当該語の初出例にあたるかどうかについては、まだ断言できない。これらの語は、哲学書と論理学書以外の文献でより早く使われていた可能性があるからである。そこで、哲学書と論理学書の初出文献よりも早い用例があるかどうかを確認するために、『日本国語大辞典（第二版）』（以下『日国大』と略称）をはじめ、『明治大正新語俗語辞典』（東京堂、1984）や『明治のことは辞典』（東京堂、1986）などに掲出される用例と、哲学書・論理学書で得た初出例の時期を逐語的に比較してみた。その結果、「出典なし」タイプの語には、他分野の文献の用例がより早いものと、哲学書と論理学書の用例がより早いものという二つの場合が並存していることがわかった。

例えば、「自然科学」の場合は、『日国大』に井上哲次郎「我世界観の一塵」(1894)の用例が出ており、筆者の調査で初出文献となった「高山1898」に比べて時期が早い。すると、論理学書「高山1898」の用例は初出例ではないことが明らかになる。また、「美学」に関しては、平林文雄(1983)によれば、中江兆民の訳書『維氏美学』(1883)で最初に造られたという。これも筆者の調査で初出文献となった「中島1898」より15年早いことになる。他分野の文献の用例がより早いもの(27語)を用語の字数別で示すと、次の通りである。

二字語 規定 学説 機能 欠点 思考 思潮 実現 制約 主題 推定

測定 体系 対比 単位 聴覚 特色 美学 理智 理由 例証

三字語 具象的 人生観 無神論 有神論

四字語 自然科学 新陳代謝 利己主義

これらの語は、哲学書と論理学書に由来したものではないことが確実である。ただし、この中

で、「規定」「測定」「理智」「例証」の4語を除いて、残りの23語は、みな明治以降の初出例が掲げられていることから、明治期の新語と考えてよい。

一方、哲学書と論理学書の用例がより早い場合もある。例えば、「人格」について調べると、『明治のことば辞典』では、『早繰辞書』(1904)での用例を初出例としており、『日国大』では、それよりもやや時期の早い徳富蘆花の小説『思出の記』(1900)の用例を掲げている。しかし、今回調査した哲学書「中島1898」に用例があったので、哲学書の用例のほうが、『早繰辞書』『思出の記』よりも早い時期の用例ということになる。また、「個体」と「前提」については、『日国大』では2語とも『字彙』初版(1881)を初出文献としているが、筆者の調査によると、論理学書「鈴木1879」の用例がより早いことになる。以上の諸例を含め、哲学書と論理学書の用例がより早いものとして、次の33語があげられる。個々の語の初出文献がわかるように、二字語／三字語／四字語の順によって所属語を掲げておく(以下同様)。

- (戸田1879) 確認 主語 論点／論理学
- (鈴木1879) 間接 個体 前提 直観
- (井上1887) 原則 嗅覚／多元論
- (清沢1888) 結論 内容 論拠
- (清野1892) 両分法／間接推理
- (金子1895) 快感 対象 特定／不可知論
- (清野1896) 聯想
- (松本1897) 感官
- (高山1898) 錯覚
- (中島1898) 人格
- (松本1899) 世界観
- (桑木1900) 幻覚 神話
- (中島1901) 周延
- (朝永1902) 系列／汎神論
- (桑木1902) 質料
- (大西1903) 排中律
- (淀野1907) 理念

以上の諸語については、哲学書と論理学書の用例がすなわち初出例であるとは断言できないが、『日国大』などの掲出例に比べて、多かれ少なかれ初出の時期が繰り上げられたのである。

4.2. 「『漢詞』未見」タイプの語 (48語)

「『漢詞』未見」とは、中国出版の『漢語大詞典』(以下『漢詞』と略称)に収録されておらず、日中共通の用語ではないことを意味する。日中共通に使われるかどうかの相違を抜きにすれば、このタイプの語は、前項の「出典なし」の語とほぼ同様に扱うことができる。ただし、の中には、「原点」「特異性」「無意識」「無機体」「論式」のように、『漢詞』に収録されていなくても、

現在の中国語で実際に使われている語も一部入っていることをことわっておく。

このタイプの語について、前述の辞典類でそれぞれの初出例を確認した結果、「一神教」「覚官」「禁欲主義」「公理」「審美学」「無機体」「我思ふ故に我在り」の7語に関しては、他分野の文献でより早い用例が見つかった。この7語を除いて、残りの41語は、いずれも哲学書と論理学書の用例がより早いことがわかった。しかも、そのほとんどは哲学と論理学にしか使われない専門語なので、たとえ初出例でないとしても、それに近いものが多いかと思われる。初出文献別でこの41語を例示すると、次のようになる。

- (鈴木1879) 格率 総念／帰謬法 真反対 特異性
- (菊池1882) 主辞
- (千頭1885) 賓辞
- (普及舎1885) 種差 論式／抽象名辞⁶
- (井上1886) 純正哲学
- (井上1887) 原点／交互作用
- (清沢1888) 実存
- (三宅1889) 全称肯定 全称否定
- (清野1892) 唯名論／直接推理
- (清野1894) 間接判断
- (金子1895) 因果律 絶対我／直接経験
- (高山1898) 類同法／兩刀論法
- (中島1898) 仮現 統覚 与件／無意識／第一性質 第二性質 矛盾原理
- (桑木1900) 主知説／自然哲学
- (井上1901) 人格化
- (朝永1902) 至高善
- (桑木1902) 媒概念
- (大西1903) 繫辞
- (淀野1907) 措定／道德律
- (紀平1907) 捨象／集合概念

以上述べた「出典なし」タイプと『漢詞』未見タイプの語には、明治初期以降の新造語がかなり集中している。このような新造語の初出時期を特定することは、本稿の目的の一つである。

4.3. 「出典あり」タイプの語 (54語)

日中語彙交流の長い歴史の中で、日本語は、漢籍や仏典などを通して、中国製の漢語を大量に取り入れた。明治以降も、主に二つの方法によって中国語からの語彙借用を継続していた。一つは、在華宣教師の漢訳洋書や英華字典から既成の訳語を借用する方法であり、もう一つは、欧米書の翻訳や対訳辞典の編集において、古い漢籍にある語を訳語として転用する方法である⁷。こ

の「出典あり」タイプの語には、後者の方法によるものが多く含まれていると思われる。ただし、訳語に転用された漢籍語のうち、明治以前から日本語に定着していたものと明治以降新たに漢籍から取り入れたものとの違いがあり、日本側文献での初出状況によって、この2種類の語を区別することができる。例えば、『日国大』によると、「判断」は『宝生院文書』(988)に、「矛盾」は『菅家文草』(900頃)に、「意義」は『日本詩史』(1771)に、それぞれ初出例を持っているので、この3語は、明治以前から日本語で使用されていたことがうかがえる。このパターンのものを次に掲げる。

意義 因果 覚悟 隔離 仮説 感情 願望 系統 誤謬 自我 実証 触発 信念
前件 総括 大我 対照 達観 知能 判断 矛盾 予備 類推 論断 (24語)

これに対して、幕末以前に用例がなく、明治以降の用例が初出例としてあげられているものがある。例えば、『日国大』によると、「集合」は『布令必用新撰字引』(1869)に、「誤解」は中村正直訳『西国立志編』(1870)に、「説明」は坪内逍遙の『小説神髓』(1885)に、それぞれ初出例を持っている。このような語は、明治以降新たに漢籍から取り入れた可能性が高い。次の諸語はこのパターンに属する。

暗示 遺伝 外観 架空 結果 広延 構成 構想 誤解 資格 集合 審美 説明
断案 適応 特殊 判定 評価 複雑 迷信 予想 (21語)

以上の語は、漢籍に出典を持ち、しかも他分野の文献の用例がより早いものである。これらの語を除いて、哲学書と論理学書により早い用例を持つ語は、次の9語ぐらいになる。

(戸田1879)	予期 論法	(中島1898)	知性 融合
(清野1889)	団体	(井上1901)	教条
(三宅1889)	形式	(桑木1902)	定立
(金子1895)	狭義		

「出典なし」や『漢詞』未見の語に比べて、「出典あり」タイプの語には、哲学と論理学の基本概念を表すものが少なく、専門語として使えるほか、一般語としても使えるという特徴を持っている。また、使用範囲が広いだけに、現代語に受け継がれやすく、現存率も高い。

4.4. 「新義・分立」タイプの語 (13語)

訳語に転用された漢籍語には、漢籍語の意味がほぼ元通りに受け継がれたものと、訳語になったきっかけで新義が生じたものという2通りの語が存在する。漢籍語の意味がどのように変化すれば「新義が生じた」と判断するかについては、研究者の間でも考え方のずれが見られるが、筆者は、漢籍語の意味が完全に現代語の新義に取って代られるといったポイントを設けて、新義の発生をチェックするようにしている⁸。

例えば、「成分」は、漢籍では「人物有定数、彼我有成分」(人と物には定数あり、彼と我には成分ある)のように、「既成の身分や役割」を意味するものであった。しかし、蘭学書『舎密開宗』(1837)では、「大気の成分、諸家の測量小異同あり」のように用いられ、「成分」の意味変化が読み取れる。幕末明治初期の辞書類を見ると、「成分」は、『英和対訳袖珍辞書』(1862)で

constitutive-part や ingredient の訳語として当てられ、『哲学字彙』(1881)でも constituent の訳語となっている。その後、この「成分」の新義が20世紀の初頭に中国に移入され、現代中国語では、漢籍語の用法が完全に消え、日本語からの新義だけが使用されている。

「思想」は、古典中国語では名詞の用法がなく、「考える」の意を表す動詞として使われていた。動詞としての「思想」は、中村正直の『西国立志編』(1870)に「暗中に模索し、懸空に思想して」とあるように、明治初期の日本語にもその用例が見られたが、その後、『附音挿図英和字彙』(1873)や『哲学字彙』(1881)などで、thought の訳語として用いられるようになり、「思考の内容や結果」を意味する名詞に移行していったのである。現代中国語においても、動詞の用法がすでになくなり、日本語の影響で生じた名詞の用法だけが残っている。「思想」に見られる品詞性の移行も、新義発生のパターンの一つとして考えられよう。「新義あり」の語のうち、「過程」「個人」「思想」「成分」「反応」の5語は、他分野の文献でより早い用例が見付かったので、哲学書と論理学書以外で新義が生じたことが明らかになった。これに対し、哲学書と論理学書の用例がより早いものは次の3語だけである。

(井上1887) 興奮

(清野1892) 客位

(高山1898) 対当

分立とは、日中両国で別々に造られ、たまたま同形になった語のことをさす。日中分立の語を判断する最大のポイントは、漢籍語元来の意味と近代日本で生じた新義との間に接点があるかどうかという点にある。例えば、「主体」は、漢籍語では、「君主の体またはその絶対的地位」の意であったが、明治以降の日本語では、「主要な部分」の意味として用いられていた。この場合の「主体」は、漢籍語元来の意味とほとんど接点を持たないので、漢籍語の「主体」に由来したというよりも、哲学用語の「客体」に対する用語として、日本で造られた新語とすべきであろう。また、「仮言」は、漢籍語の場合では「うそのことば」の意であったが、明治以降の日本語では、専ら論理学の hypothetical の訳語として、「定言的」「選言的」などと並行して用いられていた。この「仮言(的)」も日本で造られ、たまたま漢籍語と同形になったと考えられる。哲学書と論理学書共通の新出語では、次の5語が日中分立の語としてあげられる。

(清沢1888) 主体

(高山1898) 仮言的

(中島1898) 小我 非我

(桑木1900) 特徴

5. 哲学書のみに見られる新出語

前節において、哲学書と論理学書共通の新出語をとりあげたが、ここでは、表3の「1系統のみの用語」のうち、「哲学書のみ」の新出語にどんな特徴があるかを検討してみたい。この種の語の分布状況を示すと、表5のようになる。

表5によれば、明治以降の新造語に属する「出典なし」と『漢詞』未見の語を合計すると、

表5 哲学書のみに見られる新出語の分布

所在文献数	出典なし	『漢詞』未見	出典あり	新義・分立	所属語数
8種	1	0	0	0	1
7種	0	0	1	0	1
6種	1	1	1	0	3
5種	0	2	2	0	4
4種	3	2	4	0	9
3種	8	3	8	1	20
2種	14	13	25	4	56 (32.9)
1種	22	32	20	2	76 (44.7)
合計	49 (28.8)	53 (31.2)	61 (35.9)	7 (4.1)	170 (100)

()内は%

全語数の60.0%を占めている。これは、哲学書と論理学書共通の同種語の61.7%に比べて、ほぼ一致する。また、今回の調査で13種の哲学書を対象としたが、所在文献数の面から見ると、5種以上の文献に共通に見られる用語が少なく、「起点」「形態」「写象」「衝突」「単独」「難点」「余地」「立脚地」「不可知的」の9語だけにとどまっている。これに対して、1種と2種の文献にしか見られない用語は、全語数の77.6%を占め、哲学書と論理学書共通の同種語の57.2%に比べて、比率が大幅に上がっている。これによって、哲学書のみ用語は、使用範囲と頻度が相対的に低いことがわかる。次に、4タイプの語に分けて検討していくが、前節の説明と重複するところは簡単にまとめることにする。

5.1. 「出典なし」タイプの語 (49語)

辞典類で確認してみると、このタイプの語では、明治以降の初出例を持つものが49語中の41語を占め、明治以降の新語が圧倒的に多い。この中で、他分野の文献の用例がより早いものと、哲学書の用例がより早いものに二分することができる。

例えば、「起源」という語は、中村正直の『西国立志編』(1870)に見られるので、筆者の調査で初出文献となった哲学書「井上1886」の用例よりも早いことになる。また、「波動」は、明治初期の専門語彙集『医語類聚』(1872)に登録されている。これも哲学書「金子1895」の用例より時期が早い。このような語は、他分野の文献でより早い用例が見付かったので、哲学書で造られた新語ではないことがわかる。次の29語はこれに当たる。

二字語 因子 学会 観測 起源 基点 原素 指針 弱点 充分 承諾
 推想 推知 総合 対応 対抗 頂点 特種 波動 反響 否決
 否認 方式 目標 用語 容積 容量

三字語 元子論 根拠地 社会学

これに対して、哲学書の用例がより早いものがある。例えば、「学界」は、『日国大』では夏目漱石の『吾輩は猫である』(1905)にある用例を初出例としているが、筆者の調査で初出文献とな

った「三宅1889」はより早い用例になる。「出発点」の場合も、「桑木1900」の用例は、金子筑水の『個人主義の盛衰』(1908)に比べて数年繰り上げられている。このような語については、もちろん哲学書の用例をただちに初出例であるとすることはできないが、現在のところ最も早い用例である。この種の20語を初出文献別で掲げておく。

- (井上1886) 起点
- (井上1887) 形而下学
- (清沢1888) 難点
- (三宅1889) 学界
- (金子1895) 美感 複合 黙認／立脚点／中枢神経
- (清野1896) 観点 無視
- (中島1898) 依存 基因 特点
- (桑木1900) 重点／出発点／功利主義
- (朝永1902) 成員
- (淀野1907) 個別／特殊化

5.2. 『漢詞』未見」タイプの語 (53語)

このタイプの個々の語について、辞典類でその初出例を確認した結果、次の10語は、他分野の文献でより早い用例が見付かり、哲学書で造られたものではないことがわかった。

- 二字語 映写 物界 統合 確知 段階
- 三字語 一個人 正反対 厭世観 反措定
- 四字語 宗教哲学

残りの43語は、『日国大』などの掲出例に比べて哲学書の用例がより早いものとして分類するわけだが、この中には、「遺伝性」「先駆者」「思想界」「精神作用」「折衷主義」「直接判断」など、『漢詞』には収録されていなくても中国語で実際に使われている語が入っているほか、『漢詞』だけでなく、『日国大』にも収録されていない語は22語も数えられる。

- 二字語 実有 能感 反断
- 三字語 一個体 過渡点 三元論 至高美 先験的 湊合法 直覚法
直観法 哲学界 分析法 本然論
- 四字語 帰納哲学 客観世界 間接経験 社会輿論 精神作用 先天作用
直接判断 普遍真理

『漢詞』または『日国大』に収録されなかった理由として、語の専門性が強いいため、一般語を中心に載せる国語辞典の性格と合わないこと、現代語では一部の語があまり使用されなくなったこと、それに、そのほとんどは、二次的造語 (□□+□, □□+□□) によってできた複合語なので、辞典の見出し語になりにくい、といった点をあげることができる。このような語は、『漢詞』や『日国大』に収録されてはいないが、明治期の哲学書で造られた可能性が高く、今後も検討の視野に入れる必要があるため、ここでは、哲学書の用例をより早い語として扱い、初出文献

別で掲げておこう。

- (井上1887) 反断／意志力 遺伝性 三元論 思想界 哲学界 不可知 本然論
／帰納哲学
- (清沢1888) 能感／精神作用
- (三宅1889) 一個体
- (金子1895) 立脚地／先天作用
- (清野1896) 先験的 湊合法 分析法 盲目的
- (中島1898) 実有／至高美 先駆者／直接判断 普遍真理
- (松本1899) 視点／本体論／社会輿論 折衷主義／否定ノ否定
- (桑木1900) 单子／原動力 純理論 直覚法 直観法／人生哲学 本有観念
予定調和
- (井上1901) 写象／過渡点／客観世界 唯現象論
- (朝永1902) 日常生活
- (淀野1907) 楽天観／間接経験

哲学書のための用語は、語構成において、前節で述べた哲学書と論理学書共通の用語と異なるわけではない。哲学と論理学の研究内容に相違がある以上、その相違が必ず用語の面に現れてくる。これは、上掲の諸語が哲学書にあって論理学書にない最大の理由といえよう。

5.3. 「出典あり」タイプの語 (61語)

前述したように、このタイプの語は、主として訳語に転用された漢籍語である。このうち、

遺憾 異説 引用 学識 隔絶 感応 感悟 疑問 考察 従事 心界 限制 事件
事変 趣味 唱導 衝突 真相 信用 摂取 体制 大体 単独 定律 内心 發育
発散 挽回 判決 美観 方面 夢幻 余地 予防 論述 論定 (36語)

のように、明治以前の用例が見られ、古くから日本語に定着していたものもあれば、また、

圧抑 確信 感想 矯正 空談 形態 欠陥 建設 減退 参照 常規 静止 探求
認可 排斥 発射 発表 反映 判別 普及 予測 (21語)

のように、明治以前の用例が見当たらず、明治以降新たに漢籍から取り入れたと思われるものもある。以上の諸語は、いずれも他分野の文献の用例が哲学書の用例より早いものであるが、次の4語だけは哲学書の用例がより早くなっている。

- (三宅1889) 囊括
- (金子1895) 広義
- (中島1898) 感知 風潮

5.4. 「新義・分立」タイプの語 (7語)

例えば、「世紀」は、漢籍では「帝王の世代を記録する書物」の意味であったが、『明治大正新語俗語辞典』の説明によると、「明治九年(1876)に鈴木唯一が初めて century の訳語として使い、

明治十五年(1882)頃から定着し始めた」という。現代中国語では、漢籍語の古い用法がすでになくなり、日本語から輸入した century の訳語としての意味だけが使われている。「過渡」は、漢籍では「船で川を渡る」の意味であった。しかし明治以降は、『日国大』にある徳富蘇峰の用例(1886)のように、「旧いものから新しいものへ移る途中」の意に移行した。このように、「哲学書のみ」の「新義あり」の語として、「過渡」「世紀」「方針」「論文」の4語があげられるが、みな他分野の文献の用例が早いので、哲学書以外で新義が生じたということになる。

また、語形が同じでも、漢籍語と日本漢語の間に意味上の関連が全く見られない場合、日中分立の語として扱うべきであろう。例えば、「初期」は、漢籍では「最初の期待」の意味であったが、日本側の文献では、明治以前の用例がなく、明治以降では「初めの時期」の意として使われていた。「心象」は、漢籍では「心配事」の意味であったが、日本語では、哲学書「井上1887」にある用例のように、「表象」に対する語として「意識の中に思い浮かべたイメージ」を意味する。「仮象」は、漢籍では「様子を模倣する」の意味であった。これは、哲学用語として「仮の形、感覚的現象」の意を持つ「仮象」とは別語のはずである。この3語は、哲学書のみに見られる日中分立の語である。初出文献とともに掲げておく。

(井上1886) 初期

(井上1887) 心象

(淀野1907) 仮象

6. 論理学書のみに見られる新出語

この種の語は、論理学独自の用語というべきである。所在文献数と関連付けながらその分布状況を示すと、表6のようになる。

表6 論理学書のみに見られる新出語の分布

所在文献数	出典なし	『漢詞』未見	出典あり	新義・分立	所属語数
6種	0	1	0	0	1
5種	0	2	0	0	2
4種	0	9	0	0	9
3種	0	9	1	0	10
2種	1	31	4	0	36 (18.8)
1種	5	114	10	4	133 (69.6)
合計	6 (3.1)	166 (87.0)	15 (7.8)	4 (2.1)	191 (100)

()内は%

表6によると、明治以降の新造語に属する「出典なし」と『漢詞』未見の語は、全語数の90.1%を占めている。この比率は、前述した「哲学書と論理学書共通」の同種語の61.7%や、「哲学書のみ」の同種語の60.0%と比べて、大幅に増えている。これとともに、「出典なし」の語数が極端に少なく、『漢詞』未見の語だけで全語数の87.0%を占めている点も、前二者の場合

とかなり異なっている。また、今回の調査で対象とした18種の論理学書の中で、7種以上の文献に共通に見られるものが全くないのに対して、1種と2種の文献にしか見られないものは全語数の88.4%を占めている。この比率は、「哲学書のみ」の場合の77.6%と比べて、さらに高くなっている。これを通して、著者間の用語の共通性が低く、同じ概念を表わすのに違う語形が用いられることが多いという、「論理学書のみ」の新出語の特徴がうかがえる。

6.1. 「出典なし」と『漢詞』未見」タイプの語（6語と166語）

「出典なし」タイプの語はわずか6語だけである。このうち、「過剰」「提案」「定量」「無機物」の4語は、他分野の文献でより早い用例が見付かったので、論理学書で造られた新語ではないことが明らかである。論理学書の用例がより早いものは、「語格」（戸田1879）と「証説」（菊池1882）の2語だけである。

一方、『漢詞』未見」の語は、166語に達しており、「論理学書のみ」の新出語の中で、最も重要な地位を占めている。この種の語には、中国の『漢詞』だけでなく、日本の『日国大』にも収録されていないものが相当多い。2種以上の論理学書に見られる52語について『日国大』で検索した結果、このうちの32語が同辞典に収録されていないことがわかった。国語辞典の収録語になりにくい専門語の多いことが主な理由として考えられよう。また、この52語の中で、二字語（15語）は比較的少なく、三字語（16語）と四字語（21語）は全体の7割を占めている。この点もその他のパターンの語と比べて、大きな特徴といえる。三字語のうち、「残余法」「対当法」のように、「～法」を接尾辞とするものが8語見られる。四字語のうち、「絶対命題」「単独命題」のように、「～命題」を後接語基とするものが7語、「消極名辞」「普通名辞」のように、「～名辞」を後接語基とするものが6語、「矛盾対当」「大小対当」のように、「～対当」を後接語基とするものが3語、それぞれ見られる。このように、同一の後接語基を持つ類型的な造語が多いのは、「論理学書のみ」の新出語の特徴としてあげられる。以下は、『漢詞』未見」タイプの中で、2種以上の論理学書に見られる52語を初出文献別で掲げておく。

（尾崎1882） 媒語／大反対 中名辞

（添田1883） 特有性／一義名辞 多義名辞 単純転換 普通名辞

（千頭1885） 変形法

（平沼1886） 消極名辞 積極名辞

（清野1889） 偽論／単独命題

（清野1892） 客語 後節 小語 前節 大語 中語 反法 要差 要質／合併法 共変法 残余法 重体論 対当法 反対当 変性法／口頭命題 真正命題 制限転換 接続命題 絶対命題 未定命題 矛盾対当

（大西1893） 換質 後立／換質换位 間接推論 直接推論

（清野1894） 反対語

（高山1898） 既知 前立／剰余法 撰言的 背進的 附性法／具体名辞 大小対当

（桑本1902） 反対対当

6.2. 「出典あり」と「新義・分立」タイプの語（15語と4語）

論理学書のみの「出典あり」の語は、前述した「哲学書と論理学書共通」の54語（30.9%）および「哲学書のみ」の61語（35.9%）に比べて、かなり少なくなっている。これによって、明治期の論理学用語では、漢籍語の転用ではなく、主として新語の創出が行われていたことが推察できる。「出典あり」の15語のうち、「暗号」「横断」「下位」「疑団」「上位」「正法」「湊合」「通称」「定断」「等差」「立言」「例外」の12語については、他分野の文献でより早い用例が見られる。一方、『日国大』などの掲出例に比べて、論理学書の用例がより早いものは、「命名」（鈴木1879）、「背理」（戸田1879）と「定質」（菊池1882）の3語だけである。明治以降新たに漢籍から取り入れたものと思われる。

また、「新義・分立」タイプの4語は、いずれも漢籍語と日本漢語の間に意味上の接点がないもので、日中分立の語として扱うことができる。

(菊池1882)	後事 散体
(高山1898)	小辞
(桑木1902)	主部

7. 明治初期以降の新出語の特徴

7.1. 明治初期以降の新造語リスト

以上、明治期の哲学書と論理学書を対象に、西周と『字彙』初版以降の哲学と論理学の新出語を考察してきた。新出語の特定にあたり、抽出語を「哲学書と論理学書共通の用語」「哲学書のみの用語」「論理学書のみの用語」に3分類した上、さらに、「出典なし」「『漢詞』未見」「出典あり」「新義・分立」の4タイプに振り分けて、それぞれの用語の性質を明らかにしていくという方法を用いた。ここでは、前述の3分類の枠をとりはずして、新造語ともいうべき「出典なし」と「『漢詞』未見」タイプの用語を合流させ、個々の用語の初出文献がわかるように、リストアップしておく⁹。

戸田1879（5語）	確認 語格 主語 論点／論理学
鈴木1879（9語）	格率 間接 個体 前提 総念 直観／帰謬法 真反対 特異性
尾崎1882（3語）	媒語／大反対 中名辞
菊池1882（2語）	主辞 証説
添田1883（5語）	特有性／一義名辞 多義名辞 単純転換 普通名辞
千頭1885（2語）	賓辞／変形法
普及舎1885（3語）	種差 論式／抽象名辞
平沼1886（2語）	消極名辞 積極名辞
井上1886（2語）	起点／純正哲学

井上1887 (15語)	原則 原点 嗅覚 反断／意志力 遺伝性 三元論 思想界 多元論 哲学界 不可知 本然論／帰納哲学 形而下学 交互作用
清沢1888 (7語)	結論 実存 内容 能感 論拠 難点／精神作用
三宅1889 (4語)	学界／一個体／全称肯定 全称否定
清野1889 (2語)	偽論／单独命題
清野1892 (27語)	客語 後節 小語 前節 大語 中語 反法 要差 要質／共変法 合併法 残余法 重体論 対当法 反対当 変性法 唯名論 兩分法／間接推理 口頭命題 真正命題 制限轉換 接統命題 絶対命題 直接推理 未定命題 矛盾対当
大西1893 (5語)	換質 後立／換質换位 間接推論 直接推論
清野1894 (2語)	反対語／間接判断
金子1895 (14語)	快感 対象 特定 美感 複合 黙認／因果律 絶対我 立脚地 立脚点／先天作用 中枢神経 直接経験 不可知論
清野1896 (7語)	観点 無視 聯想／先験的 湊合法 分析法 盲目的
松本1897 (1語)	感官
高山1898 (11語)	既知 錯覚 前立／剰余法 撰言的 背進的 附性法 類同法／具体名辞 大小対当 兩刀論法
中島1898 (16語)	依存 仮現 基因 実有 統覚 特点 人格 与件／至高美 先驅者 無意識／第一性質 第二性質 直接判断 普遍真理 矛盾原理
松本1899 (6語)	視点／世界観 本体論／社会輿論 折衷主義／否定ノ否定
桑木1900 (15語)	幻覚 神話 重点 单子／原動力 主知説 出発点 純理論 直覚法 直観法／功利主義 自然哲学 人生哲学 本有觀念 予定調和
井上1901 (5語)	写象／過渡点 人格化／客観世界 唯現象論
中島1901 (1語)	周延
朝永1902 (5語)	系列 成員／至高善 汎神論／日常生活
桑木1902 (3語)	質料／媒概念／反対対当
大西1903 (3語)	繫辞／排中律／選言命題
淀野1907 (7語)	個別 措定 理念／特殊化 道德律 楽天観／間接経験
紀平1907 (2語)	捨象／集合概念

7.2. 初期以降の新造語の特徴

上掲した明治初期以降の新造語は191語に及ぶ。調査した哲学書と論理学書を出版年次に並べているので、このリストによって、いちおう新造語の出現時期をとらえることができる。概して言えば、哲学と論理学にしか使われない専門性の強い用語に関しては、筆者の調査結果は初出例に近いと思われるが、一方、哲学と論理学以外でも使われるような汎用性の高い用語に関しては、現在の結果を初出例と認定するには、なお今後の検証が必要であろう。

新造語の分布から見れば、調査した31種の文献のうち、「三宅1890」だけを除いて、他の30種には、多かれ少なかれ新造語が含まれていることがわかった。また、新造語の初出状況を見ると、明治25年(1892)を境目にして、前期の13文献からは61語(31.9%)、後期の17文献からは130語(68.1%)がリストアップされている。つまり、約7割の新造語が明治後期に造られたということになる。新造語の特徴については、次の諸点によってまとめる。

(1) 新造語に見られる専門性と汎用性

諸文献の中で、新造語が10語以上確認されたのは、「井上1887」「清野1892」「金子1895」「高山1898」「中島1898」「桑木1900」の6文献である。この6文献のうち(7.1を参照)、論理学書の「清野1892」と「高山1898」の新造語を取ってみると、そのほとんどが論理学にしか使われない専門語で占められていることに気付く。これに対して、哲学書の「井上1887」「金子1895」「中島1898」「桑木1900」の新造語を見れば、哲学の専門語がある一方、日常で使われるような一般語も相当多いことがわかる。この両方に見られる専門性と汎用性のずれは、哲学と論理学の研究内容の相違によって生じたものと思われるが、上掲の6文献に限らず、哲学用語と論理学用語の全体で見られる傾向といえる。

(2) 字数別から見た新造語の語構成

新造語の191語は、字数別で振り分けると、二字語76語、三字語60語、四字語54語、および五字語1語(否定ノ否定)からなっている。二字語のうち、「格率」「偽論」「語格」「主辞」「小語」「大語」「賓辞」のような専門性の強い用語も多いが、「確認」「間接」「結論」「個体」「個別」「人格」「前提」「直観」「聯想」「論拠」「論点」のように、日常でもよく使われる汎用性の高い用語が数多く含まれているのが特徴としてあげられる。語構成の面から見れば、「～点」「～覚」「～感」「～象」などの漢字を後接語基とする二字語の存在がとくに注目される。

□+点(8語) 観点 起点 原点 視点 重点 特点 難点 論点

□+覚(4語) 幻覚 錯覚 嗅覚 統覚

□+感(3語) 快感 能感 美感

□+象(3語) 対象 写象 捨象

これらの語は、専門語としての用法がその原点であったかと思われるが、哲学・論理学の分野以外で使われることもあるので、ただちに哲学書と論理学書に由来する新造語とは断言できない。しかし、「□+点」「□+覚」「□+感」「□+象」などの用語グループは、現代語に与える影響が大きいので、今後も、このような類型的な造語の様相を追究すべきである。

三字語では、「一個体」「絶対我」「至高善」「至高美」の4語を除いて、その他は、いずれも接辞性一字語基を持つ□□+□型の語構成となっている。このうち、□□+法(15語)、□□+論(7語)、□□+的(4語)、□□+性(3語)、□□+律(3語)、□□+力(2語)、□□+界(2語)といったパターンの三字語は、『字彙』初版のときからすでに見られるものであるが、□□+化(人格化、特殊化)、□□+観(世界観、楽天観)、□□+点(過渡点、出発点、立脚点)の3パターンは、明治初期以降の新しいものとして注目に値する。「□□+化」については、『字彙』初版には、「開化」「分化」「溶化」「漸化」などの二字語が見られたものの、哲学書の範囲

で、三字語の「□□+化」が現れたのは、20世紀に入ってからのことである。「人格化」(井上1901)と「特殊化」(淀野1907)の用例は、接尾辞「□□+化」の用法がいよいよ確立されることを示している。また、「□□+観」については、西周の造語には、「主観」「客観」「此観」「彼観」などの二字語があっただけで、まだ三字語での使用は見当たらなかった。そのため、哲学書「松本 1899」にある「世界観」の用例は、現在のところ最も早く、重要視すべきものである¹⁰。「□□+点」については、前述した「□+点」の二字語と関連させて考えると、明治前期に、二字語の創出とともに、しだいに、「□□+点」の形で三字語の造語にも生かされるようになったようである。「立脚点」(金子1895)、「出発点」(桑木1900)、「過渡点」(井上1901)などの初出例を見ると、いずれも明治後期のものである。

四字語では、『字彙』初版のときと同様に、相変わらず、類型的な造語が数多く見られる。その中で、□□+名辞(7語)、□□+命題(7語)、□□+哲学(3語)、□□+作用(3語)、□□+主義(2語)などは、初版にも見られるパターンである。これに対して、□□+対当(大小対当、反対対当、矛盾対当)、□□+推論(間接推論、直接推論)、□□+判断(間接判断、直接判断)、□□+経験(間接経験、直接経験)などは、明治初期以降の新しいパターンといえる。しかし、明治初期以降の四字語は、『字彙』初版にあったような既存の四字語のあいだを埋めながら造られていたこともあって、類型的な造語の数は、しだいに減少する傾向が現れていた。

(3) 初期2文献と『字彙』初版の影響関係

本稿では、主として、西周と『字彙』初版以降の新出語に焦点を当てている。しかし、とりあげた諸文献のうち、明治初期の「戸田1879」と「鈴木1879」は、『字彙』初版(1881)よりも早く出版されていたので、この2文献と『字彙』初版の用語間の影響関係に留意する必要がある。筆者の調査によると、「戸田1879」にはなかったが、次の16語は「鈴木1879」と『字彙』初版で共通に見られる用語である。タイプ別にあげると、

「出典なし」	間接	個体	前提	理由	
『漢詞』未見	格率	総念／帰謬法	真反対	特異性	
「出典あり」	異議	結果	集合	矛盾	論法
「新義あり」	思想	成分			

のようになる。これまでに、「出典なし」と『漢詞』未見タイプの9語については、『字彙』初版の新造語として扱われることが多かったが、この結果によると、『字彙』初版ではなく、論理学書「鈴木1879」を初出文献とすべきである。「新義あり」タイプの「思想」と「成分」についても、「鈴木1879」の用例のほうは『字彙』初版より早い。

8. おわりに

本稿は、明治初期以降の哲学と論理学の新出語、および、その初出文献を特定することを主な目的としている。今回の考察によって、明治初期の西周と『字彙』初版の用語は、初期以降においても、中心的な役割を果たしていることを再確認した上、初期以降の新造語として、200語近くリストアップできた。また、哲学用語の汎用的傾向に対して、論理学用語が専門性に傾いてい

るという特徴についても指摘した。ただし、哲学と論理学以外でも使われるような汎用性の高い用語については、哲学書と論理学書における初出文献が明らかにされたとしても、ただちに初出例であるとは断言できない場合が多い。ここで、『日国大』などの辞典類と照合して、現段階での初出例をあげておいたが、今後の検証と修正は不可欠である。

注

- 1 詳しくは本誌12号に掲載した朱京偉(2002)を参照。
- 2 調査に用いた文献の原本は、主として国会図書館の蔵本を利用したが、一部は昭和以後の活字本を用いたものもある。なお、研究対象の選定にあたって、表1に掲げた諸文献のほか、明治初期の文献を中心に、次の哲学書と論理学書の用語についても国会図書館の蔵本によって調査を行った。年代順に掲げておく。

◇哲学書

吉田五十穂訳編(1880)『西哲小伝』吉田五十穂刊／山口松五郎訳述(1884)『哲学原理』加藤正七刊／有賀長雄訳(1884)『訳解・近世哲学』弘道書院／和田滝次郎訳(1884)『哲学通鑑』石川書房／有賀長雄(1885)『聖門哲学論』丸善商社書店／中江篤介(1886)『理学鉤玄』集成社／鳥居忱訳(1887)『哲学一斑』普及舎／辰巳小二郎(1887)『斯氏哲学要義』哲学書院／菅了法(1887)『哲学論綱』集成社／今井恒郎訳補(1887)『哲学階梯』群英閣／田島象二(1888)『哲学問答』東雲堂／高橋五郎訳(1890)『現今唯物論』秀英舎／伴山三郎(1890)『哲学大意』博文館／渋谷保(1894)『哲学大意』博文館／井上円了講述(1894)『純正哲学』(哲学館第一学年講義録)／前田長太訳(1896)『哲学論綱』文海堂／普及舎編(1897)『哲学問答』(新撰百種第一編)／中島力造(1900)『現今の哲学問題』普及舎

◇論理学書

清野勉(1883)『格致哲学緒論』嶽山楼／坪井馬三(1883)『論理学講義－演繹法帰納法－』酒井清造、岩本三二刊／今井恒郎訳(1887)『応用論理学』博聞社／松本源二郎(1888)『論理学講義』兵林館／清野勉(1890)『経世危言(帰納論理)』哲学書院／千頭清臣(1890)『論理学入門』敬業社／服部宇之吉(1892)『中等論理学』富山房／富山房編(1896)『論理学問答』(普通学問答全書第18篇)／田口義治編(1897)『論理学問答』大阪吉岡本店／有賀長雄(1898)『論理学講義』明治法律学校講法会／清野勉(1903)『論理学』(哲学館第15学年度高等科講義録)

- 3 用語抽出の基準は、紙幅の関係で省略した。詳しくは、朱京偉(2002)の3.1を参照。
- 4 表記の便宜上、それぞれの文献名は著者名と西暦の出版年で示した。このうち、井上円了の『哲学一夕話』と『哲学要領』は、ともに明治19-20年(1886-87)の間に出版されたが、区別しやすいように、『哲学一夕話』を「井上 1886」と表記し、『哲学要領』を「井上1887」と表記することにした。なお、三宅雪嶺の『哲学涓滴』と『論理学』はともに明治22年(1889)に出版されているが、略称ではとくに区別せず、2書ともに「三宅1889」と表記することにした。
- 5 「出典あり」「出典なし」「漢詞」未見」の3タイプは、朱京偉(2002)の分類と完全に一致しており、それぞれ、「古い漢籍に出典がある語」、「『漢語大詞典』にあるが、漢籍の出典がない語」および「『漢語大詞典』に収録されていない語」の略称にあたる。また、今回の調査の実情に応じて、もとの「新義あり」タイプに、「新しい意味に転用された語」(新義)と「日中両国で別々に造られ、たまたま同形になった語」(分立)の両方を含ませ、「新義・分立」タイプとしたのである。分類の詳細については、朱京偉(2002)の3.2を参照されたい。

- 6 (普及舎1885)とは、明治18年(1885)に出版された普及舎編『教育・心理・論理術語詳解』という術語集の略称である。『字彙』初版以降の哲学辞典類の用語と哲学・論理学書の用語を照合してみると、ほとんどの新出語は、哲学・論理学書のほうに早く現れている。しかし、「種差」「論式」「抽象名辞」の3語は(普及舎1885)での用例が哲学・論理学書よりも早い用例となっているので、その通りに掲げた。
- 7 このことについては、森岡健二(1991)は「再生転用」と呼び、自著の中で、「〈再生・転用〉とは、すでに古語・廃語となった過去のことばを、そのまま再生したり、あるいは新しい意味に転用したりして、復活する場合のことをいう」と説明している(同書 p.251)。本稿でいう「古い漢籍にある語」(略して「漢籍語」とする)は、森岡氏の考え方と一致するものである。
- 8 新義の発生をとらえるチェックポイントについては、朱京偉(2001)を参照。
- 9 ただし、「論理学書のみ」の『漢詞』未見』タイプの語に関しては、全語数の166語ではなく、2種以上の論理学書に見られる52語だけを取り入れた。本稿の6.1を参照。
- 10 朱京偉(2002)によると、「世界観」の初出例は、同文館編『哲学大辞典』(1912)にあったほか、「人生観」と「歴史観」の初出例は、それぞれ、徳谷豊三郎ら編『普通術語辞彙』(1905)と朝永三十郎編『哲学辞典』(1905)に見られる。

参考文献

- 斎藤毅(1977)『明治のことば—東から西への架け橋—』講談社
- 朱京偉(2001)「中国の日本語研究—語彙」『国文学解釈と鑑賞』66-7, 56-65, 至文堂
- 朱京偉(2002)「明治期における近代哲学用語の成立—哲学辞典類による検証—」『日本語科学』12, 96-127, 国書刊行会
- 朱京偉(2003)『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社
- 瀬沼茂樹(1974)「解題」明治文学全集80『明治哲学思想集』418-429, 筑摩書房
- 飛田良文編(1979)『哲学字彙訳語総索引』笠間書院
- 平林文雄(1983)「びがく(美学)」『講座日本語の語彙11 語誌Ⅲ』163-167, 明治書院
- 広田栄太郎(1969)『近代訳語考』東京堂
- 船山信一(1958)「明治前期論理学の実践的性格」『立命館文学』153, 63-88, 立命館大学人文学会
- 船山信一(1959)「明治哲学文献年表」『明治哲学史研究』附録1, 376-392, ミネルヴァ書房
- 船山信一(1960)「明治後期論理学の認識論的傾向」『立命館文学』178, 165-181, 立命館大学人文学会
- 船山信一(1962)「明治前期論理学における演繹法と帰納法」『立命館文学』208, 1035-1056, 立命館大学人文学会
- 船山信一(1965)「明治哲学の系譜」『増補明治哲学史研究』ミネルヴァ書房所収、『船山信一著作集 第六巻・明治哲学史研究』25-74, こぶし書房1999年版再録
- 峰島旭雄(1974)「年譜」「参考文献」「明治哲学思想年表」明治文学全集80『明治哲学思想集』430-458, 筑摩書房
- 森岡健二(1991)『改訂・近代語の成立 語彙編』明治書院

辞典類

- 樺島忠夫・飛田良文・米川明彦編(1984)『明治大正新語俗語辞典』東京堂出版
- 小学館編(2000-2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館

惣郷正明・飛田良文編(1986)『明治のことば辞典』東京堂出版
羅竹風主編(1988-1994)『漢語大詞典』(全12卷)漢語大詞典出版社

付 記

この研究は、住友財団2003年度「アジア諸国における日本関連研究助成」(研究テーマ：中国における日本製哲学用語の受容と変遷)による成果の一部である。寄稿の後、査読の方に貴重なご指摘とご助言をいただいた。ここに、住友財団と査読の方に心より感謝申し上げます。

(投稿受理日：2005年1月11日)

(最終原稿受理日：2005年5月12日)

朱 京偉 (しゅ きょうい)
北京外国語大学日語系
10089 中国北京市西三環北路2号
zhujwpost@163.net

On the formation of the philosophical and logic terminology after the early Meiji era

ZHU Jingwei

Beijing Foreign Studies University

Keywords

historical lexicology, academic term, philosophical term, logic term

Abstract

In his treatise published in the No.12 issue of *Japanese Linguistics*, 2002, journal this author made an investigation of the entries in dictionaries of philosophy during the Meiji era. In the treatise the author made his first attempts to determine the period when the modern philosophical terminologies came to be established, and focused his analysis on the philosophical terminologies in the works by Nishi Amane in the first edition of the *Tetsugaku-jii* (『哲学字彙』).

This thesis aims to further the study of the new the philosophical terms that came into being after Nishi Amane and after the publication of the first edition of the *Tetsugaku-jii* (『哲学字彙』). In writing the thesis the author selected 31 volumes of philosophical and logic works published in the Meiji era and studied and classified the professional terminologies in them, before finally picking out 200 new philosophical terms that came into use after the Meiji era. On the basis of this he classified the new philosophical terms into four groups, made analysis of each group, and finally pinpointed the earliest examples representing the four groups respectively in philosophical and logic works.

It is this author's view that in judging the exact time of first appearance of an example word, the methodology adopted in this thesis is applicable only in the professional fields of philosophy and logic. However, beyond these two fields, further verification is necessary prove that those indeed were the times those terms made their first appearance.